

国立台湾大学留学レポート
2024年7月28日～8月24日
福島県立医科大学医学部4年 211087馬場菜月

1) 留学志望理由

今回私が留学を希望した理由は2つあります。

まず一つ目は英語力の向上です。世界に向けて自分の考えを発信するためには、英語で論文を執筆することや英語でのコミュニケーション能力が必要です。台湾では医学教育が英語で行われていることから、英語を使う場に身を置くことで自分自身の英語力を成長させることができると考えました。

2つ目は将来的に福島県の医療に貢献したいと考えているからです。私は将来福島県で医師として活躍したいと考えています。もちろん福島医大で学び、福島県で研修を積むことも重要ですが、海外留学を経験することで国際的な考え方を学び、福島と世界の医療の違いを比較することで、福島県の医療の課題を発見することができるのではないかと思います。さらに福島県の医療の良い点を発見し継続していくことで、福島の医療をより良いものに変えていけるのではないかと考えました。

2) 実習内容：家庭医学(Family Medicine)

Family Medicineでは7月29日から8月9日までの2週間にわたり実習を行いました。実習予定は主にレジデント4年目の林愷容さんと相談し決定しました。主な活動としてward round（病棟回診）や外来見学がありました。

【病棟回診】

病棟は緩和ケア、老年医学の2つの分野に分かれています。特に、緩和ケア病棟での経験が印象深く残っています。ここでは主治医、レジデント、PGY（卒後研修医）、学生が一つのチームを作り、ミーティングをした後に30分から1時間で約5人の患者さんの病室に訪問しました。患者さんの多くにご家族が付き添っており、体位変換など日本では看護師が行う仕事もご家族の方が行っていることが多いと感じました。緩和ケアの患者さんは寝ていて会話ができない方が多いため、主治医はご家族との会話にほとんどの時間をかけていました。ご家族がどういったことを不安に思っているのか、慎重に耳を傾けている姿が印象的でした。“good death not just dying” という考えのもと、麻酔が効いているか、苦しんではいないか、ご家族はどのように考えているのかということ非常に重要視していると感じました。

医学とは直接関係のないことではありますが、Family Medicineの方たちはレジデントや研修医の方を中心に、若い医師がメインとなって勉強会の実施、学生に指導を行う雰囲気がありました。疑問点や理解できないことがあったら、比較的年齢の近い医師の方にすぐに訊くことができたため、非常に充実した実習を行うことができました。

【外来】

台湾のFamily Medicineは非常に多様で、様々な専門外来（HBV、HPV予防、禁煙外来、トラベルクリニック、婦人科、慢性病管理など）が存在し、各分野に特化した医師がいる点が強みです。

一般外来では、入院患者の術後ケアや複合疾患の管理にも関与しており、専門性が非常に高いと感じました。特に、複数の疾患を抱える患者が増えている現在、このような家庭医療の役割は今後ますます重要になると感じました。

老年医学外来では、患者の不安や家庭状況に寄り添った診療が重要であることを学びました。例えば、子どものいない高齢夫婦への診察では、医師が長い時間をかけて患者の将来への不安に耳を傾けていました。単に疾患を治すだけではなく、患者の生活全体を支える医療が重要であることを強く実感しました。

また、地元のローカルクリニックも訪れることができました。日本のクリニックとは異なり、夜遅くまで診療を行っていることに驚きました。これは仕事を持つ人々が平日でも診療を受けやすくするための配慮であり、夜の方が混み合うこともあるそうです。小さなクリニックでも患者に寄り添った診療が行われており、その中で働くスタッフの優しさも印象に残りました。

外来での実習を通してFamily Medicineが扱う領域の幅広さを改めて感じ、多様な分野の専門性を高められる点が非常に面白いと感じました。疾患を治すことではなく、患者さんの社会的背景に重点を置く考え方を学びました。

また、台湾の医療の特徴として、1人で来院されるかたは少なくご家族や兄弟と一緒に来院される方が非常に多いと感じました。病棟にもご家族の方がいらっしゃるものがほとんどだったため、医療に関して家族が関わる頻度・時間が長い文化なのだと思います。

3) 実習内容：救急・災害医療

NTUの救急では、安い費用で受診できるため、県立医大の救急と比較して症状の軽い患者さんが非常に多く、廊下まで患者さんが溢れているのが印象的でした。一方でICUとwalk-inの救急外来とは区画が分かれており、緊急度・重要度に応じた患者の整理がされていました。医学生が1人で患者さんの診察（比較的軽い症状の方）を担当することもあり、医学部6年生になると夜間実習も行うそうです（もちろん医師の指導のもとですが）。

救急医療学講座での2日目には、電車とレンタカーを利用して台湾東部にある花蓮を案内していただきました。花蓮では今年4月の地震により被害を受けた建物跡地や、その時にどのような活動を行ったのか、DMATの方の案内のもと訪れました。

また最終日の台中での光田総合医院での訓練では、他国からの攻撃による緊急時の患者輸送や病院機能の維持について話し合いを行いました。緊急時には医療資源やスタッフの数が限られている中でいかにして患者さんの安全を保つかが大事ですが、この訓練ではそういった実際の状況を想定して話し合いながら対応策を考えました。日本と違い身近に想定される危機であることから、緊張感が漂う訓練だと思いましたが、参加した方は真剣に取り組みながらも時には笑顔でフランクに意

見を出し合っている姿が印象に残っています。また普段からこういった訓練をするメリットとして緊急時に連絡を取るべき関係者の顔と名前が一致し連携がとりやすいといったことが挙げられるそうです。

こういった被災地の訪問や訓練をする中で、3.11との共通点がいくつかあると思いました。3.11の際には、情報通信が安定しなかったため、病院避難に時間がかかり、地震による直接の被害ではなく避難の過程で亡くなった方が多くいました。今回の訓練でも患者さんを安全な場所に移動させる方法や移動後の管理については多く話し合われていました。災害や他国からの攻撃といった異なる事象でも、病因避難の過程で課題となる点には共通点も多く、災害医療についてもっと深く学んでいきたいと感じた実習となりました。

実習の後、林鍵皓先生や訓練に参加した先生方に食事に連れて行って頂く機会がありました。台湾の災害医療に興味を持つ留学生は初めてだと仰っており、驚きました。緊張や不安もありましたが、多くの準備と努力をして良い経験ができました。そして何より、中国語を理解できない私たちに対して、林鍵皓先生をはじめ多くの先生方が時間をかけて私たちに災害医療について教えてくださったことに本当に感謝しています。

4) 留学流の生活や学生との交流について

基本的に朝の8:00からのミーティングに参加し、その後病棟回診や外来見学を行いました。お昼は大学病院の食堂を利用しました。台湾大学の食堂はショッピングモール並みの広さ、店舗数がありお昼には多くの方が利用しています。日本でも馴染みのあるスターバックスやモスバーガー、ミスタードーナツもありますが、台湾料理を提供するお店がほとんどです。私たちはその中でもビュッフェスタイルの台湾料理のお店がお気に入りです。そこは値段も安く（一食300円程度）さまざまな台湾料理を楽しむことができました。

6月にNTUから3人の学生が福島医大に一か月間留学していました。その時の友人が、私たちが台湾に留学している際に様々な場所に連れて行ってくれたり、おいしい食べ物を紹介してくれたりしました。お昼に時間があるときは一緒に牛肉麺や餃子を食べて行きました。台湾では餃子とご飯は一緒に食べないことに驚きました。また皮蛋という黒い卵があり、私はそれがとても好きなのですが、台湾では好き嫌いが分かれる料理だそうです。

台湾では物価が安いといいますが、チェーン店の価格は日本の値段と大きくは変わりません。一方で家族経営のローカルなお店は非常に安く、おいしいお店が多いです。ただ注文方法が日本とことなることや、料理名を見ても味が想像できないことがあるので、友人が案内してくれて非常に助かりました。

台湾にはUBIKEというほぼ無料で使える公共の自転車があります。UBIKEを使って国立台湾大学のメインキャンパスを案内してもらいました。このメインキャンパス

はMRT公館駅の近くにあり、学生のための本屋やお店が多く存在します。非常に広大なキャンパスであるため、自転車を使っても一周するのに1時間近くかかりました。UBIKEは台北市内の移動には非常に便利なので台湾に留学に行く際にはぜひ登録をお勧めします。

週末には、台北ドームに台湾のプロ野球を観戦しに行きました。台北ドームは去年開業したばかりの新しい施設です。もともと野球観戦が好きで、ぜひ台湾で行きたい場所の一つだったため、友達に連れてきてもらうことができ本当に嬉しかったです。日本とは異なり自チームの攻撃中にはチアリーダーがステージで応援ダンスを披露しており、熱狂的に踊っているファンが印象に残っています。また駅直結でかなり便利な場所にありました。おしゃべりをしていてホームランを二本とも見逃してしまったことが反省点です。

最終日には火鍋に連れて行っていただきました。台湾の火鍋にはお肉や野菜だけでなく、鴨血（カモの血の塊）や米血糕（もち米と豚の血を混ぜたケーキ）など台湾ならではの食材も多く入っており、おいしかったです。台湾の人は甘い飲み物が大好きなので、ドリンクにミルクティーを選んでおり、最後まで文化の違いに驚きました。また友達の一人がスクーターに乗せてくれ、MRTやUBIKEも十分便利だと思っておりましたが、スクーターはその何倍も便利なることを実感しました。台湾であれだけ多くのスクーターが走っている理由がよくわかりました。

台湾の友人たちのおかげで、一か月充実した生活を送ることができました。本当に感謝しています。

5) 今後の展望

a) この留学が福島県にどういったよい影響をもたらすと思うか

福島県の医療と比較したときに、NTUの医師と学生の距離が非常に近いと感じました。家庭医療学講座では平日朝8:00から9:00までの1時間、レジデントを中心に勉強会を開いていました。そこでは、家庭医療の領域でよく見られる疾患に関するプレゼンや症例報告、海外から来た方の講演会などが行われていました。こういった取り組みは、朝早くから行われ大変なことではありますが、プレゼンの練習や新しい知識の習得の場となるため、良い活動だと感じました。何よりこの勉強会を専攻医3、4年目の若い先生方中心に行っており、学生や研修医の方と一緒に積極的に学ぶ姿勢がとても勉強になりました。こういった場があることで、レジデントや研修医と学生の距離が縮まり、学生目線として疑問点を質問しやすいと感じました。このような雰囲気・交流の場が福島にもあったらよいと思うと同時に、自分が研修医・専攻医となった際に学生と積極的にコミュニケーションをとってお互いに成長できるようにしていきたいと思いました。また学生のうちから専攻医の人や研修医の人に積極的に話を訊きに行こうと思いました。

私たちは日本での臨床実習を行う前に留学させていただいたため、日本の医療の現場を実際に学んではいません。10月から始まるBSLを通して、医学

知識だけでなく福島で実際にどのような医療が提供されているのかを学び、台湾で学んだことを生かしていければと思います。

b) 今後の学生生活をどのように送って行きたいと思うか

この留学で重要だと感じたことは2つあります。

一つ目は英語力です。日本では医学は基本的に日本語で学び、教科書も日本語で書かれています。授業も日本語で行われるため、英語で疾患を説明できる学生はかなり少ないと思います。しかし、台湾では医師はもちろん医学生も当たり前のように英語でレポートを書き、プレゼンをしています。教科書やカルテはほとんど英語です。

日本人が日本語で医学を学べるということはとても素晴らしいことであると思う一方で、英語が使えないということは、世界で進んでいる知識を取り入れるのに時間がかかり、さらに自らの考えを世界に発信する力が弱いということの意味しています。私が医師になるまであと2年あります。医師になったときに英語が使えないから、論文が書けない、読めない、海外から来た研究者と議論ができない、留学に踏み出せないということにならないように、臨床実習の2年間でしっかり医学英語の習得に努めようと思いました。

二つ目に、人とのかかわりの重要性を改めて実感しました。今回の留学にあたって、私たちはさまざまな希望（ローカルクリニックを訪れたい、台湾での災害対策について学びたいなど）を伝えさせていただきました。台湾の先生方はお忙しいなか、休みの日を利用してレンタカーを借りて花蓮を案内していただきました。また留学を始めるにあたって山下先生、長谷川先生にご紹介いただいた姚さんには、ご実家にお邪魔させていただいたり、姚さんのご家族の運転で台中にある日月潭に連れて行っていただいたりしました。人とのかかわりを大切にしていくことで自分の人生の選択肢・可能性を広げ、今後の人生に良い影響を与えていくと思います。

c) 海外で学びたいと思うようになったか

異なる国の文化・考え方や医療の現場を実際に自分の目で見て学ぶことは新鮮で楽しい経験でした。今回はほとんどが見学のみで実際の治療に関わることは出来ませんでした。臨床実習開始前の留学だったため、BSL後や医師になった後に海外留学をすることで、日本と海外で治療方針にどのような違いがあるのか、医療制度がどのように違うのか、より高い解像度で学べると思います。そのような機会をいただけたらまた挑戦したいです。

6) 最後に

この留学にあたって、山下俊一副学長、病態制御薬理医学講座下村健寿教授、細胞統合生理学講座狭間章博教授、放射線災害医療学講座長谷川有史先生、放射線健康管理学講座坪倉正治先生、アミール偉先生、総合内科・総合診療学講座菅家智史先生、救急医療学講座菅谷一樹先生、企画財務課高橋篤志さんなど多くの先生方、事

務の方のお力添えをいただき、留学を行うことができました。心から感謝を申し上げます。この留学を通して、人とのつながりがいかに大切なものなのかということ強く実感しました。台湾や日本で新しくできた縁を大切にして、福島の医療に貢献できるよう努力していきたいと思えます。



国立台湾大学メインキャンパス（医学部とは別キャンパス）をUBIKEで案内してもらった時の写真



家庭医学部の病棟で張皓翔先生と



家庭医療外来の実習を行った国立台湾大学病院。日本統治時代に建てられ、現在も病院として使われています。



光田総合医院での訓練の様子